第1特集
小学校英語を一段深める指導
「必然性」のある活動へ

中学生との交流で
必然性と相手意識のあるコミュニケーション活動

三田祐太
Mita Yuta
（青梅市立第五小学校主幹教諭）

✣教科になっても変わらないものは

2020年度からの教科化が目前となってきた。小学校での外国語教育はコミュニケーション能力の育成が最も重要視されている。これは新学習指導要領になり，教科になったとしても変わらない。教科になり今までの外国語活動との違いとしてよく取り上げられることとして，目標の中に5領域を定められたことがある。今までもあった「聞くこと」，「話すこと」は2つに分け「話すこと［やり取り］」「話すこと［発表］」とし，そして新しく「読むこと」「書くこと」を加えた。指導時数も年間70時間（週2時間）と増えた。これは外国語（英語）を読むこと，書くことのできる児童を育成していくと理解してしまいそうになる。

しかしここで注目したい点が，この5領域のウエイトである。新学習指導要領では以下のように示されている。

「『読むこと』『書くこと』については，中学年の外国語活動では指導しておらず，慣れ親しませることから指導する必要があり，『聞くこと』『話すこと』と同等の指導を求めるものではないことに留意する。」（第2章外国語科の目標及び内容，第1節外国語科の目標）

あくまでも小学校段階ではコミュニケーション能力の育成が大切であるということになる。この観点は教科化され本格実施となった時にも，常に頭に留めておく必要がある。

✣学級担任・専科教員が授業を行う利点と課題

文部科学省は指導者は担任，AETはアシスタントであるとしている。学級担任が自分の学級を指導していくという基本姿勢は変わらない。筆者も外国語活動・外国語科は学級経営に直結するものであると今までに実践で体感してきた。それはこの教科・領域が「コミュニケーション能力の育成」をねらいとしているからである。学級の中でコミュニケーション能力を高めていくためには，学級内の児童が信頼し合い，認め合い，協力し合える集団になっていないとできない。逆を言えば，外国語の授業で高い教育効果が得られている学級は，学級経営においても円滑に進行していると言っても過言ではない。

英語の専科教員を配置し指導した方がよいという声もある。東京都の公立小学校でも英語の専科教員を配置している学校はある。私自身「東京都英語専科モデル事業」の指定を受け，1年間英語専科として指導をした。3年生から6年生までの全学級を1人で指導したが，そのメリットは教材準備である。1学年3学級あれば同じ教材を3回使用することができる。さらに外国語の場合には「色を扱う」となれば，どの学年でも色の絵カード等を使用することができる。その分，次の授業の準備に時間が割ける。もうひとつは3年生から系統的な指導ができることである。学級担任の場合には1学年1クラスの指導になるが，専科の場合にはその学校のすべてのクラスを指導することができるので先を見据えた指導が可能となる。

✣小中連携と外国語活動の課題

小中連携教育は各自治体，各学校で大きな課題として取り上げられ，様々な研究や実践が行われている。外国語はその特性から小中連携がしやすいとされ，多くの学校で取り組まれている。しかし中学校の教員は英語科の免許を持った方々。かたや小学校の教員は近年になって英語の指導を始めたばかり。外国語活動が始まったばかりの時は温度差があったことは間違いない。中学校の先生方がいかに小学校の外国語活動の理念に賛同してくださり，それを受け継いで中学校の英語の授業に発展させてもらえるかが肝心であった。そのために私は様々な中学校の先生と数多くの授業実践を行ってきた。

✣課題の克服を中学校の先生が理解してくれた

その中でここで紹介する実践事例は，*We Can! 2* のUnit 9にあるJunior High School Lifeの単元である。試行期間としてデジタル教材しか手元にない状態での実施であったので，授業案を組み立てる時にオリジナルの要素を織り交ぜながら，さらに次年度以降も継続して取り組めるような単元計画にしたいと思った。この授業に取り組んだ際の自治体（東京都立川市）では，中学校英語科の教員が6年生の外国語活動の授業にTTとして5～10時間入る取り組みを市の小中連携教育活動として行っている。その取り組みの中でこの授業を行うこととした。

まず，授業は1月に実施をし，4月から進学する実際の中学校の写真（部活動や学校内の施設，学校行事等）を見せ，そこに写るものの英単語をフラッシュカードにしてインプットしたり，中学校の先生に中学校の学習や生活について英語で話をしていただいたりして，児童の興味関心のある題材を使用することとした。中学校に関する様々な英単語を十分に音声で慣れ親しませながらインプットしたあと，「中学校の先輩に対して英語で手紙を書いてみよう」というメインアクティビティを設定した。児童はMy name is ～. I like ～. I can ～. I want to ～. などの既習表現を使用して自分の好きなこと，中学校でしてみたいことを，メッセージカードに書いた。スペリングにも十分に音声で慣れ親しんだ後，フラッシュカードを見ながら書き写して手紙を完成させた。

作成後は担任（私）がチェックをし，評価をつけ中学校の先生に手渡すという流れで単元を終えた。年によって小学校に来てくださる中学校の先生も変わる。この年に一緒に取り組んだ中学校の先生は市の研究指定を受けた小中連携教育の研究や，教務主任会などでご一緒してきた先生であった。授業を一緒に行うことは初めてであったため，小学校の英語教育についてどのようなお考えをもっているかわからなかったが，この授業案を提案してみると，さっそく中学校の各部活動の写真を撮影してきてくださったり，ワークシートも小学生が使いやすいようにとアドバイスをしてくださったりした。授業を検討する中で，その先生からいただく案はどれも児童理解を十分にされているものであった。

常々その先生に「小学校の教員は様々な授業を毎日行うこと自体が大変。その中で新しく入ってきた外国語活動に挑戦していることが立派です。」という言葉をかけていただき，中学校の英語科の先生が小学校の外国語活動の必要性や大変さを理解してくださったことが本当にうれしかった。その先生と行ったこの授業で自分に自信がついた。中学校の先生と同じ方向を向いて担任が授業を作り，実践していけたことでその時の課題を克服できたと思う。

実は中学生に手紙を書く授業はそれで終わりではなかった。授業終了後，数日してから中学校の先生が来校され封筒を渡された。その中には中学3年生が書いた英文の手紙が20通ほど入っていた。小学生からの手紙を中学生に読ませ，返事を書かせる授業を行ってくださったのである。返事を受け取った6年生は食い入るように手紙を読み，英文の長さや書かれている文字の美しさに驚いていた。あまりにも児童が興味をもっていたので，教室に掲示したところ，その後も手紙の掲示物に立ち止まり文章をみている様子が続いた。

✣教科化されたらなお一層

教科化され，危惧していることは，教員が教科書の進度を気にしたり，評価のことばかりを考えたりしてしまうことである。教室で意欲的なコミュニケーションの育成を行うためには「必然性」は必須である。児童理解をしている担任が目の前の児童が「今何を求めているか」を考え，作り出す授業こそが大切であると考える。小学校の外国語教育が大きく変わるこの時に，中学校の先生とも協力しながら新しい「外国語」授業を構築することが求められている。児童も教師もスマイルで授業が展開できるようにしていくことが一番大きな目標である。

☺働き方改革とは何かを考えるも名案は出ず，まずは楽しんで仕事するようにしてます。（三田）